

一人の人間として

山形県南陽市立赤湯中学校

三年 伊 藤 恵 子

こんなことを経験したことはありませんか。言葉が通じず、自分の気持ちを何一つ伝えられなかったこと。殻に閉じこもり、自分自身を恨んだこと。

かつて、そんな経験をした、私の話をします。

七年前の春。小学三年生だった私は、大きなカバンを背負って、日本にやってきました。幼い私は、新しい環境に驚き、これからの生活に期待をふくらませました。

しかし、現実は予想以上に辛いものでした。全く日本語のわからない私は、ささいなことで勘違いをしては、トラブルを起こしました。

やがて、そんな私をかまってくれる人は、ほとんどいなくなりました。

読書に没頭した私の日本語力はグンと上がりました。四年生になると、トラブルを起こすこともほとんどなくなりました。心から信頼しあえる友達もできました。日本に来て、初めて、学校が楽しいと思うようになりました。

ところが、一番恐れていたクラス替えがありました。私は友達と離れて、五年生の教室に入りました。激しいグループ化。私は一人になりました。

この頃のことは、ほとんど覚えていません。忘れ

去ってしまうほど忌まわしい記憶なのです。

はつきりと覚えていることは二つだけあります。一つは、一人ぼっちで本を読んでいたこと。二つめは、心がどんどん磨れていったことです。現実から逃げ惑うために言い訳をする、そんな自分が大嫌いでした。

自分自身を見失っていた日々は、六年生になって変わりました。

私は中学生になりました。中学校に入学すれば、全てが変わると、そう信じていました。でも、それは変わりませんでした。

私は中国へ帰省しました。一カ月の間、私は叔父と叔母と一緒に過ごしました。二人はとても明るくて、いつも友達や家族に囲まれています。どうして、私とこんなに違うのでしょうか。二人はよく言いました。

「与えられた数十年という人生。暗い毎日を過ごすより、楽しく生き抜いたほうが良いでしょう？」

私はいつも、自分は他の人と違うから仲良くなれないのだと思っていました。でも、実際は違うのかもしれません。そのことにやっと気づきました。周りが私を避けているのではなく、私が周りの人を避けていたのかもしれない。

今までは、なんとなく時間の流れにのっていたけれど、これからは一日一日を楽しんでいこうと決意しました。

私は変わりました。中途半端に伸びていた髪を切り、新たな気持ちで日本へ帰ってきました。

教室に入ると、黒板には「おかえりなさい」の大きな文字が躍っていました。黒板いっぱい書かれた、みんなからの寄せ書き。手作りのくす玉。胸がいつぱいになりました。私は一人じゃないんだと、初めて気づきました。素晴らしい仲間が囲まれているのです。

たのです。「今まで、どうして気づかなかったのだろう。」今までの私がとてもおかしく思えました。

私は毎日笑って過ごせるようになりました。今まで演じ続けてきた「私」を捨て、ありのままの自分をさらけ出しました。周りには自然と人が集まり、やっと友達ができました。

今、私は図書委員長として、部活ではパート・セクシヨンリーダーとして活動をしています。より良い生徒会、吹奏楽部のために、日頃から自分にできることを探しています。

昨年、私は海外研修で、カナダへ行かせて頂きました。そこでは、肌や髪の色が違う人々が共に生活をしていました。お互いを認め合い、尊重し合っているのです。

現代の多文化社会に生きる私達は、まず、自国の文化をよく理解することが必要だと思います。そして、身近にいる家族、クラスメート、友達を尊重すべきだと思います。これが、自分と顔も性格も違う人々と共存する上で、一番大事なことでないでしょうか。

皆さんの周りには、自分の殻にこもって、辛く苦しい思いをしている人はいませんか。そんな人には、ぜひ、手を差し伸べてください。あなたのたった一言が、その人を変えるかもしれません。

地球はかつて、一つの大陸でした。けれど、今、そこに国境、言語、宗教という大きな壁が建っています。でも、私達の心の間に壁をつくってはいけません。私達はみんな、一人の人間として生きているのです。

そして今、苦しんでいる君へ、私が一番伝えたいこと、それは「人はいつでも変わる。可能性は無限大。」ということです。

自分の体験を通じて、心の壁は乗り越えられるということを多くの方に伝えたいと思い、この作文を書きました。ハンデを背負って苦しんでいた私を変えてくれたのは叔母の一言でした。一人の人間として大切なことに気づかされました。私も、苦しむ人を笑顔に変えられるように努力していきます。

作文を書くに当たって